

優秀賞作品

「KANO～1931 海の向こうの甲子園～」感想文

阿部英明

40代 会社役員 山形県

2014年夏、私は日本青年会議所に属するグローバルリーダー育成塾に参加し、アジア諸国から見た日本の現状と、中国やインド等との国際情勢・平和の維持について学ぶ機会に巡り合いました。その約半年に渡るカリキュラムの中で、初の海外ミッションとして選ばれたのが台湾でした。初めての台湾の土を踏む事と現地で魏徳聖（ウェイ・ダーション監督からの講義もあることを聞かされていたので、慌てて「海角7号」と「セデックバレ」をレンタルしポータブルDVDを飛行機に持ち込んで日本を出発して行きました。

しかし私は恥ずかしながら最近まで台湾が昔日本の統治下にあったとは、実は知らなかったのが現実であります。第二次世界大戦では多くの日本人が台湾や東南アジア諸国に渡り国の為に亡くなり、そして敗戦国としての理不尽な想いを負わせられたことなど、戦後生まれの我々は何も意識もせずに平和ボケしていた不安を抱きながら台湾に到着した思いでした。

高雄市内にある大きな映画館にて、台湾でアンコール上映された映画KANOが始まりました。なんと表現したらいいのでしょうか。昔の日本を異国の台湾の若者が演じその表情や懐かしさのあるストーリーの展開と、日本映画には少ない意表をつかれた感動が波のように次から次へと押し寄せる3時間の長さを感じさせない映画でした。例えるならば、よそから来た外国人から故郷の価値を再発見させられ、大切な贈り物を頂いたかのような気分そして、大きな貸を作られた感動とでもいえるのではないのでしょうか。特に私は現地入りしていたことにより、その臨場感は語りつくせないほど、大きな余韻として受けてしまった気が致しました。

今日本は戦後の復興により高度経済成長期を経て、ある意味成熟した社会として少子高齢社会を迎えております。モノが溢れ必要な情報はいつでも簡単に集めることが出来る様になりました。しかし、その反面で夢を持ってない若者がマスコミに取り上げられる社会にもなりました。パパイヤの実を大きくする方法はまさに昔の日本人には当然と言った根性話の様な懐かしさと、追い込まれた人間の強い精神力の作り方と方向性を教えていたのではないのでしょうか。台湾は東日本大震災でどの国よりもいち早く、多くの支援金を送金してくれた国でもあります。そんな民族間の歴史問題や自然災害を、パパイヤの釘に例えられ強く生き平和な未来を見つめられる人間になって欲しいという願いを訴えているように

感じました。

漢人、蛮人、日本人の混合チームは異なる民族・人種が互いに力を合わせて、同じ目標に取り組む、アジアの平和と希望を描いたような夢のチームであります。また、近藤監督は、野球は呼吸だ、しっかりと息を合わせろ、民族の違いはない。と言っています。映画を通してKANNOが支持された訳には、台湾の人達のこうした平和の願いも込められている様に思えました。今、台湾も政権交代と言う大きな歴史の転換期にきています。そのような雰囲気が、この映画が支持された背景としてもあるのではないのでしょうか。

八田與一氏によるダム工事もまた、現代の日本人にはあまり知られておらず、高雄でKANNOを見てからダムの記念館に行き、その広大な広さと我々が知らない所で台湾に大きな功績を遺した與一氏夫婦の実話にも大変感動させられました。映画でも甲子園への出場とダムの完成と言う巡り合わせが、共に日本人二人の偉人が導いた奇跡であり、そのような日本人の精神の素晴らしさを台湾全土が一つになって称え希望に震えた立たされた瞬間ではなかったのではないのでしょうか。

しかし以前、金美齡著「私は、なぜ日本国民となったのか」で台湾語で語られる「リップンチェンシン」つまり「日本精神」には、「清潔」「公正」「勤勉」「責任感」「正直」「規律遵守」があったうえで、中国の政治的な問題により必死になって祖国台湾のために尽くしてきた著書の事実があり、また著者は日本の反省すべきは、戦前ではなく戦後にあると述べていました。戦後日本は、一度も台湾人とまともに対応せず、日本は手のひらを返すように台湾人の同意もなしに台湾は中国の一部と勝手に決めてしまった。いま日本精神（リップンチェンシン）はいまや神話になりつつあるということ¹⁾でした。しかし、KANNOを拝見して「リップンチェンシン・日本精神」は今でも台湾に必要とされ誇られている事を、われわれ日本人はもっともっと知る必要があると思いました。まだ遅くありません。その国境を越えた絆を、これからも平和の象徴として共感できる様に多くの日本人からこの映画を観て欲しいと思いました。

帰国後、私は日本青年会議所の卒業式に出席するため山形から新幹線に乗り、しまなみ海道をレンタカーで渡り卒後式会場である松山市に入りました。実は私にはもっと明確な目的があったのです。それは導かれたかのように坊ちゃん球場と野球資料館・KANNO記念碑を見学し、事前に松山市役所に連絡を取りある人物のお墓があるお寺に急ぎたいその一心でありました。お寺は松山城の裏側に位置し使用人の方よりお墓の場所を教えてもらい、そして私は台湾の友人から送って頂いたKANNOの黒色のTシャツに袖を通し、故近藤兵太郎監督の墓石前に深く手を合わせる事が出来たのです。感無量とはこのことと思います。偶然にも台湾に行き日本上映前のKANNOの映画を観てから、ここまで自分が尊敬できる日本人との出会いにより大きく考え方が変わったことと、台湾での日本人の偉業と誇りを、これからも子どもたちの世代にも話して伝えていきたいと思いました。

本当に、素晴らしい映画をありがとうございました。

引用

1) 金美齡「私は、なぜ日本国民となったのか」(WAC BUNKO) - 2010/2